

令和6年度 学校評価のまとめ

山形県立楯岡特別支援学校寒河江校

1 令和6年度学校評価アンケートの実施について

(1) 保護者アンケート「学校生活アンケート」

- ① 実施期間:令和6年12月20日(金)～令和7年1月9日(木)
- ② 方法:アンケート記入後、厳封で提出いただき、教頭が開封して集計
- ③ 対象者:18名
- ④ 項目内容:全10項目。経年の変動が分かるよう、昨年度と質問内容を継続。

(2) 学校自己評価(教員アンケート)

- ① 実施期間、②方法:保護者アンケートと同様。
- ② 対象者:12名
- ③ 項目内容:全12項目。昨年度までは15項目の質問であり、各項目に個人評価と学校全体評価を設けていたが、今年度3項目を減らし学校全体評価のみにした。なお、経年の変動比較には、昨年度の結果から、今年度と同じ質問項目と学校全体評価の値のみを取り上げた。

(3) アンケートの集計結果を運営委員会で考察、改善のポイントを職員会議で提案し、その後の学校経営に生かす。

(4) 結果は保護者に文書でお知らせするとともに、学校ホームページ上で公開する。

2 アンケート結果と考察 ※別紙集計結果参照

(1) 学校関係者評価(保護者アンケート)

- ① 回収率、回答率はともに100%。
- ② 4段階での全体の平均値は3.77で、昨年度(3.83)より低くなっている。
- ③ 昨年度と比較して6項目で平均値が下がっている。しかし、全10項目のポイントは3.6以上である。
6で評価2があるが、それ以外は全員が4と3で評価されている。
- ④ 1、2は、年々ポイントが上昇している。昨年全保護者が4で評価した4は、今年度は低くなっている。児童数の増加により参観体制の仕方や学習掲示に工夫が必要である。進路に関しては研修会や進路だよりなど積極的に行ってきたが6の結果を見ると継続的に評価が低い。改善と工夫が必要である。施設面に関する7は、児童数の増加や校舎の老朽化により、厳しい評価をいただいた。日々の清掃や修繕により改善をしていく。10については、全項目の評価点のなかで例年一番低い値である。保護者が求める地域への情報発信の期待が高いことが伺える。

(2) 学校自己評価(教員アンケート)

- ① 全体の平均値は、昨年度と同様3.59である。
- ② 各項目の結果は、以下により良好な評価と捉えることができる。
 - ・ 全項目で平均値が3.0以上。全項目において、評価点1と2が無かった。
 - ・ 項目11については、全員が評価点4をつけ、学校として、全員で一丸となって取り組んできたことに、各自が自信をもっていると感じる。
 - ・ 12項目中、前年比プラスとなった項目が7項目。
- ③ 前年比マイナスの項目は2、4、5、6、7の5項目であった。特に下がったのは5、6、7の3項目である。今年度、学校研究で児童の実態把握について取り組んだ。結果、個別の指導計画への目標設定など、大きく見直すことができた。そのために5の項目については、全員が評価を厳しくしたと考えられる。6についても同様に、進路研修会等を計画的に実施したことで、進路に関して不十分な知識であるということを知り、さらに研修を深めたいという思いの表れだと考える。7は、児童数が増加したこと、より学習環境の手狭さが際立った結果である。校内での会議の場でも、児童が安全に適切な日常生活の指導を実施することが度々検討課題にあがっていることから、学習環境の確保および学習内容の工夫が今後も課題と考えられる。

3 改善策

(1) 学校関係者評価(保護者アンケート)

昨年度の結果と比較し平均点が低くなっている項目、および、低い状態で変化がない項目について改善策を示す。

① 項目4について

昨年度はコロナ禍で控えていた授業参観を実施したことで評価が高かった。これを受け、今年度は日常的に学校参観や行事への参加人数を限定することなく行った。しかし、保護者からは、さらなる参観や連絡帳等での日々のお知らせが期待されている。学校として、連絡帳による連絡の仕方や内容、学校だより、学級だよりでの発信は、連絡帳を書く時間や発信回数などの点から、現状維持で対応していく。一方、必要に応じて保護者への電話による連絡や個別面談を行うようにし、保護者との情報の共有を密に図っていく。また、給食試食会や親子行事など、保護者が児童の生活を体験できる場を新たに設けていく。

② 項目6について

今年度も1年生の児童が多く、昨年同様、中学部、高等部での学習や卒業後の進路について見通しを持っていない方が多数いた。そのため、大江校と共催して進路研修会や独自に施設見学会、卒業生の保護者による学習会を開催した。ただし、学習面に関しては、小中高が一つになった本校と比べて寒河江校は小学部のみ为学校のため、中学部、高等部ではどのような学習をしているのか、情報が入りにくいという点が課題である。そのために、今年度から大江校の中学部と交流活動を計画的に行い、その様子を学部だよりで発信していくようにした。今年度からの取り組みのため、定期的な交流までには至っていないが、今後も交流の内容を吟味し、大江校の生徒と寒河江校の児童とが一緒に学習活動する場を実際に参観し、中学部以降の学習活動を保護者が実際に知る機会を検討していく。

③ 項目7について

日々の清掃活動や教室内の間仕切りカーテンの設置、廊下側ガラス窓の透明化による教室内の採光化など、限られた空間ではあるが、児童が安全に清潔に過ごすことができる環境は整えている。また、高松小学校の好意により、音楽室やラーニングセンターの使用など、特別教室の使用が定期的に行えるようになり、学習活動に幅が広がっている。しかし、児童数が増えたことで、日常生活面においては、学習環境の狭さは課題である。例えば、興奮した児童が休息するクールダウンの場所や給食を配膳する場所については、教室を開放するなど、児童の学習に影響が生じている点もある。こうした点については、週時程の調整や学習形態の工夫など、使用できる環境の中で、児童の安全と快適な学習環境を構築できるように、全教職員が工夫して対応していく。

④ 項目10について

学校だよりを地域公民館や陵西地区の小中学校に掲示、HPで紹介した。学校の取り組みを広く地域に発信する一方、地域の方を先生にした学習活動も継続的に実施した。また、今年度からは、西村山地区以外の方を講師に定期的にダンス学習やアニマルセラピーなどの学習も行った。幼稚園や保育所、放課後等デイサービス事業所の方を招いた学校見学会の実施、学区の教育委員会への情報発信など幅広く学校での取り組みや児童の学習活動について、物的、人的な側面から情報の発信を行った。こうした取り組みを今後も継続していくことで、徐々に学校の取り組みや児童の学習を知ってもらうことができると考えている。そのためにも、単発的な取り組みではなく継続的な取り組みとなるように計画を進めていく。

⑤ 自由記述では、「支援学校に入学してもうすぐ丸2年。入学させるまで色々悩みましたが、支援学校に入学させて良かったと強く思っています。子どものことを私よりも理解してくださっているからこそ安心して通わせられています。」という暖かい意見をいただいた。一方「連絡帳についてですが、家での様

子を先生に伝えることで、子どもの行動の背景であったり、会話が増えたり、自分の思っていることが正しく相手に伝わることで「話をすることが楽しいな」と感じてくれるといいな…と願ってなるべく詳しく記入したいなと思っています。先生方、とてもお忙しいと思いますが、学校での様子、先生が感じたことなど、について、日々の連絡帳でもう少し教えていただくことはできないでしょうか。最近、お話が上手にできるようになり、一生懸命学校での出来事を私達に教えてくれようとしています。ただ、言葉が不明瞭なこともあり伝わらないことに歯がゆい思いをして伝えることをやめてしまいます…。記入するスペースも少ないように感じます。ご検討いただけるとありがたいです。」という項目④に関連した意見をいただいた。連絡帳については、児童が増えたことで、担任が下校までの時間の中で、児童から目を離して記入する時間の確保が難しくなっている。そのために、どの児童にも平等に必要なことを記述して書くように記述枠を設け、必要事項を印で伝えるように改善した。それゆえに、児童の学習の詳細が伝わらないという点も生じている。このことについては、保護者に事情を丁寧に説明するとともに、必要に応じて、個別面談期間以外にも個別面談を設け情報の共有を図ることを伝え理解をしてもらえるように取り組んでいく。

(2) 学校自己評価(教員アンケート)

昨年度より特にポイントが下がった3項目について改善策を示す。

① 項目⑤について

教員から「個に応じた「分かる」授業については、国語算数、学校研究とリンクしている自立活動の時間に、グループ別に指導を行っていることなどを考えると、限られた教員数で「分かる」授業を行っていると思います。評価が低い理由は不明ですが、個人的に課題と思われることは、個別の指導計画について作成、評価に、労力を要すると感じている方が、特にクラスの人数が多い場合などで多いのではないかと思います。すべての教科等で、3観点による評価は必要なのか(特に日生や生単など)、様式は現状でよいのかなど、見直すポイントはあるのではないかと思います。」という同様の意見が出された。「分かる」授業については、一人一人の児童の実態を把握し、グループ化し、個に応じた課題や支援を工夫して行っているという点では全員が共通の意見である。一方、評価については、3観点を意識しすぎることで、かえって評価すべき視点を難しくしているように感じる。児童が「分かる」とは何なのか?どのように評価をすることが正しいのか?など、学校として整理されていないことで、教員の困惑をまねているように感じる。

児童が「分かる」とは、どのようなことなのかについて、評価の3観点と照らし合わせながら全体で共通認識を持つことが必要である。今後の重点的に取り組む一つとして取り上げていく。

② 項目⑥について

進路に関しては、様々な意見があるが、なかでも「児童生徒や保護者の願いに耳を傾け」という点では、個別面談では限られた時間の中で学習の様子についての話が主であるため、保護者の思いや願いに耳を傾ける機会がなかなか取れないのではないか。」という意見が出されている。実際、入学したての児童の保護者と6年生の保護者では、将来に対する願いも異なっている。そうした、保護者に寄り添って「願い」を聞くことができないことが、大きな課題と言える。自分の子どもに対する悩みや将来の不安、育児の悩みなど、保護者が抱える思いに触れる機会が少ないのも事実である。何かあったら個別面談と考えているが、すべての保護者の発信を受け取ることは出来ていない。学習評価の面談以外にも、子どものことを話すための「個別面談」を、どの児童にも設定する必要があると考えている。

③ 項目⑦について

児童数の増加に伴い、全教員が教室数の確保を望んでいる状態である。それに付随して、一人一人の学習の質を上げてきたことで、教材教具の数も増えている状況がある。「何とか工夫しながら教材を保管しているが、限界を感じているところもあります。外倉庫のようなものは置けないもの

でしょうか。」という意見は、多くの教員から出されている。現在あるスペースを有効に活用しながら置き場所や置き方を工夫する。デジタル化することで、実際のを減らしていく。など、具体的なものからバーチャルなものへ移行できる教材については検討していく必要が出てきていると感じる。今後の校内のICT化の推進と並行して、全員で検討していく。

一方、教室の機能性については、間仕切りカーテンやパーテーションなど、空間を仕切ることで、個に応じた学習環境を今後も継続して整備していく。

- ④ 自由記述では、「限られた職員数の中で多くの巡回相談に対応していると思います。公開研修会や実態把握研修会の実施により、センター的機能を果たすことができたと思います。」という意見があった。今年度から、公開授業研究会を公開研修会に変更し、授業提案と授業づくりを同時に参加者とともにワークショップ形式で行うことにした。ただ見て聞くだけの研究会ではなく、実際に授業づくりのポイントを皆で共有することで、参加者も本校の教員にとっても実りの多い研修会が実践できた。その次の実態把握研修会も同様に行ったが、好評であった。少ない教員ではあるが、一人一人が学び、力をつけていくために、積極的に参加型の研修会を実施し地域の教員との連携を深めていくことが、センター的役割だと感じている。今後も可能な範囲で取り組んでいく。

4 まとめ

(1)「児童生徒にとって 来るのが楽しみな学校」にするために

今年度から国語や算数、自立活動の時間における指導を、45分間行えるようにし、児童が「わかる」「できる」「もっとしたい」と思える、一人一人に応じた授業展開を全教員が工夫して行った。単純なプリント学習ではなく、「わかる」ための具体的な教材教具については、多くのものを各教員が自作し、それらを共有しあうことで、学びの質を高めてきた。また、ICT機器の活用も積極的に行い、児童が自ら操作し使用できるルールと環境を整理した。今後も、児童の期待を裏切ることがないように、日頃からの丁寧な授業準備を全教員で行っていく。

(2)「保護者にとって 安心して任せられる学校」にするために

今年度は、寒河江校が開校して10周年になる。このことを記念して児童と教職員、保護者とが連携して、学校活動を盛り上げていくための取り組みを多数行った。シンボルマークの作成においては、全員が参加して自分たちの学校のシンボルマークを決めるコンテストを行った。この取り組みを通して、学校と保護者との距離が近くなった。11月には、保護者が主体となって親子行事「心つながる音楽会」が企画され行われた。それ以降も保護者が学校の取り組みに積極的に参加するようになり、学校主体で行ってきた進路研修会も学校と保護者とが連携して行った。連携しあうことで、児童の家庭での様子や保護者の思いを知る機会が増えた。次年度からは保護者の子どもへの考えや将来の思いなど、子どものことを話し合う場を少し増やすことで、一層保護者と連携し学習活動を行っていく。

(3)「地域にとって 信頼して相談できる学校」にするために

巡回相談の依頼件数や学校独自の教育相談の件数は年々増加している。今年度は自立活動の時間における指導の充実という研究のテーマのもと学校研究を行った。特に、参加者と共に考えまとめていくワークショップの形式をとった公開授業研修会、研究の成果を参加者と共に共有する実態把握研修会は、西村山地区の小中学校の多数の先生方が参加し共に研修を深めることができた。

一方、こうした地域の学校への取り組みは、これまで保護者に伝えることはなかった。結果、保護者から学校の一層の地域への情報発信が求められる要因の一つになっている。次年度からは児童の学習の様子以外にも、研究の内容など、学校が地域に対して行っている取り組みについても保護者に発信をしていく。

(4)「教職員にとって 働きやすく働きがいのある学校」にするために

TT形式による指導で児童の学習活動を行ってきた。教員同士で、児童のことを日常的に話し児童のことを考え実践することを常に行ってきたことで、協働して働くということが定着した。教員による学校評価も、チームワークの良さが高く評価されている。児童のことをお互いに話し、児童の成長を共に共有できる環境を、今後も継続していく。